

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

「努力」に目を向けて

～みんな「違う」のだから～

京都府立洛北高等学校附属中学校 2年 木下 理彩

私が小学校高学年の頃、同じクラスにAさんという女の子がいました。Aさんには軽度の障害があり、親しい人とは普通に会話ができるけれど、人前で話したり、自分から話しかけたりといったことが難しいようでした。また、みんなと同じ授業についていくことも大変そうでした。そのため、Aさんは特別支援学級で授業を受けながら、給食や掃除、休み時間は私達と同じように過ごしていました。私はその頃、仲の良い友達と一緒にAさんを誘って大縄でよく遊んでいました。

ある日、私いつもと同じように友達と一緒にAさんを遊びに誘いました。

「Aちゃん、外で大縄しいひん？」

私はその聞くと、Aさんはこう答えました。

「今日はいいわ。Bちゃんと遊ぶ」

この答えを聞いたとき、私は正直少し驚きました。今まで遊びに誘うといつも「うん」と言っていたAさんが、初めて誘いを断ったからです。私はその時、「今までにもAさんは、他の人と遊びたくても、気持ちをうまく伝えられず、がまんして私達と遊んでいたということがあったかもしれない」

「私は今までAさんの気持ちを考えずに遊びに誘っていたのではないか」という思いに駆られました。自分から話しかけるのが苦手なAさんのことを思って、こちらから遊びに誘っていたけれど、実はそれはAさんの気持ちに耳を傾けていないことだったのです。

こんなこともありました。ある日、給食の献立にAさんの苦手なおかずが出ました。Aさんはそのおかずを全て食缶に戻しました。それを見ていた私は「少しだけでも食べたなら？」と言おうと思ったけれど、なんとなく遠慮してしまい、結局何も言えませんでした。

これらの出来事をきっかけに、私はAさんとの関わり方について振り返ってみました。すると、気付いたことが3つありました。

1つ目は、Aさんの気持ちを私が勝手に思い込みで決めつけていたということです。Aさんが自分から話しかけるのが苦手なら、むしろAさんの気持ちをこちらから聞き、Aさんが自分の気持ちを話しやすくすることが大切なはずです。それなのに、私はAさんの気持ちはこうだと思い込み、Aさんの心の声を聞こうとしていなかったのです。

2つ目は、Aさんには優しく接しようとしていたということです。つまり、特別扱いをしていました。もちろん、Aさんに対する「配慮」は必要です。しかし、「遠慮」は必要ありません。注意すべきことは遠慮せずに注意すべきなのに、私は遠慮してしまい注意できませんでした。

3つ目は、Aさんのことを「障害のある人」と意識してしまっていたということです。「Aさんなら仕方がない」心の中でこんな風に考えてしまっている自分がいたのです。

障害のある人に対して、特別な思いを抱いてしまうのは、私だけではないでしょう。多くの人が、意識していなくても障害のある人となない人との違いを感じているはずですが、確かに、障害のある人は障害のない人と違うところがあります。でもそれは、障害の有無に関係なく、誰でも皆違うところがあると思います。出来ること、出来ないこと、得意なこと、苦手なことは誰にでもあることで、自分ができないこと、苦手なことを練習したり、自分にはできないと諦めずに努力することは、皆に共通する大切なことです。そして、努力しても出来ないことは周りの人と助け合って生活していく。これは、障害の有無に関係なくとても重要なことです。だから、障害のある人となない人との違いを意識する必要はないと思います。違いに目を向けるのではなく、「目標に向かって努力している」そのことに目を向けるべきではないでしょうか。

町を歩いていると、さまざまなバリアフリーの設備を目にします。私達が障害のある人の「違い」にではなく、「努力」に目を向け、その努力を少しでも支えられるように、困っている時にそっと手を差し伸べること。これが障害のある人にとっての1つの大きな「バリアフリー」になるのではないのでしょうか。